綜　　説

農村医学の将来を考える

富山県農村医学研究会
会長　豊田文一

30数年前，数名の同志とともに日本農村医学会の設立を企画した頃，貧しい農民を合言葉にして「疾病の背後にある地域社会」という理念から，農村の実態を掘り起し，いかに健康な村づくりを推進するかを実践医学の道を辿りながら今日まで至ったのである。もちろんここに至るまで，アカデミックの面からのあらゆる批判に耐え，学問としての一分野を開拓したのは，この問題に心をよせられる人々の情熱の賜でもあった。

しかし農業構造の変貌は昔日の感が失われ，富山県のごときは専業農家はもはや 2.9%で全国第1位（全国平均13.4%），米作地帯の年間農業労働日数は10日に満たない所が大半である。しかも農家収入は都市居住者を上まわっている。もちろん社会環境の急速な変化によって，疾病そのものも特殊性がある面でうかがえるかも知れないが，一律化しつつあることは否めない。日本農村医学会設立当時，この学会の存在意義を失うとき本当の社会福祉の達成されるときであると同志と語り合ったことが想起される。

しかし，他方考えてみると人間が生きるために食糧生産の基地として農村は消滅するものではない。農村のある限り，そこに住む人々の健康を守ることは学会の使命である。私の常に考えていることは，この農村を広汎な観点にたってみつめ，人文科学，社会科学の面からも攻究する必要がないだろうかである。最近の学会の動向をみると，現象医学のみにとらわれ学会設立当初の健康と疾病に対し，地域社会とそこに住む人々，家庭，部落の現状まで入りこむ問題点が指摘されることの乏しい憾がしてならない。

敢て私見を披瀝したが，設立当初の原点にかえり，再考する必要があるのでなかろうか。賢明な会員各位のご批判を乞う。